

最新栽培技術「ぼろたん」

農業研究センター球磨農業研究所

中尾 郁美

1 植え付ける。(定植)

時期：**秋植え**（11月下旬～12月中旬） または **春植え**（2月中旬～下旬）

※一般的には秋植え。

① 植栽本数を決定する。(設計図を考える)

② 植え付け位置を決定する。

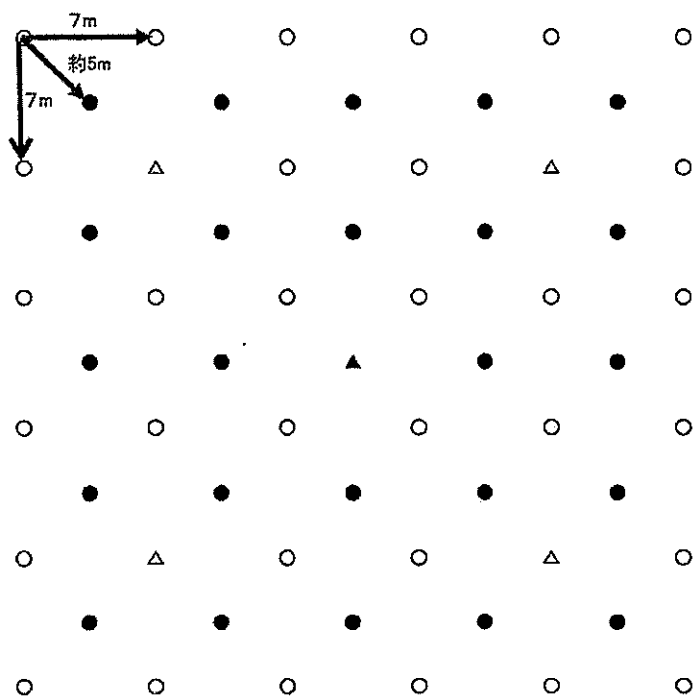


図2 周囲からのクリ花粉飛散が多い園の植栽
植栽本数：10aあたり40本植栽（間伐後20本）
植栽比率：<植え付け時>ぼろたん92%、受粉樹8%
<間伐後>ぼろたん90%、受粉樹10%

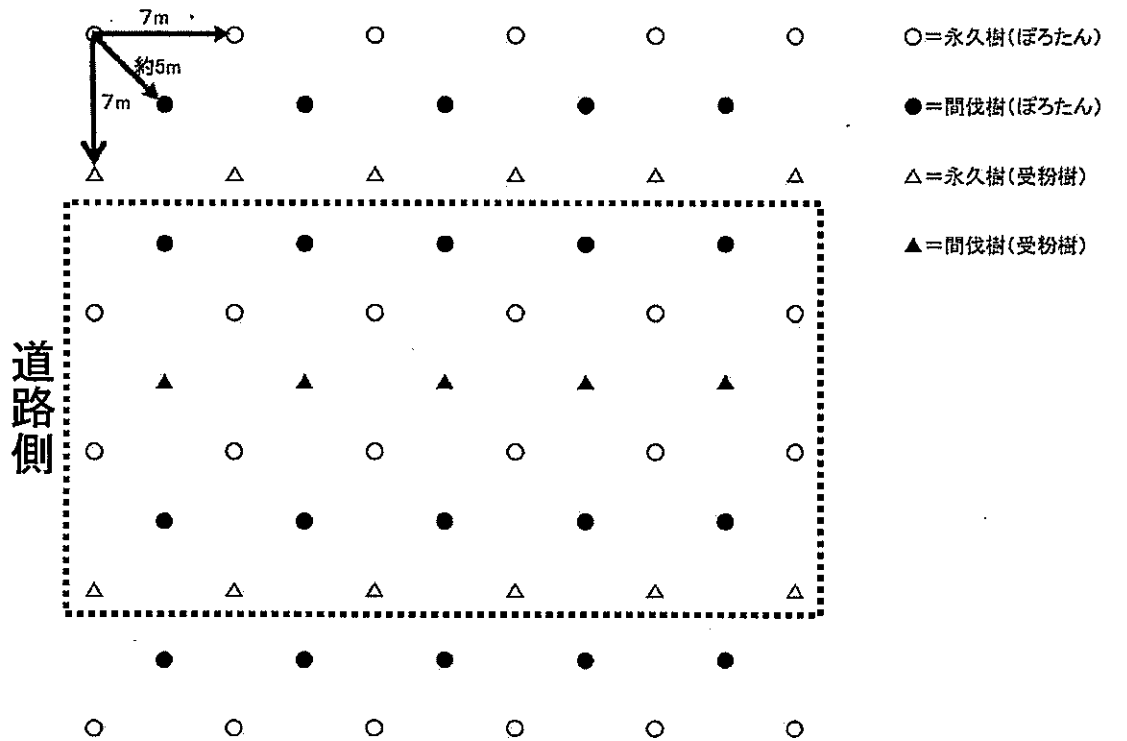


図3 周囲からのクリ花粉飛散が少ない園での植栽
植栽本数：10aあたり40本植栽（間伐後20本）
植栽比率：<植え付け時>ぼろたん72%、受粉樹28%
<間伐後>ぼろたん70%、受粉樹30%

～ポイント～

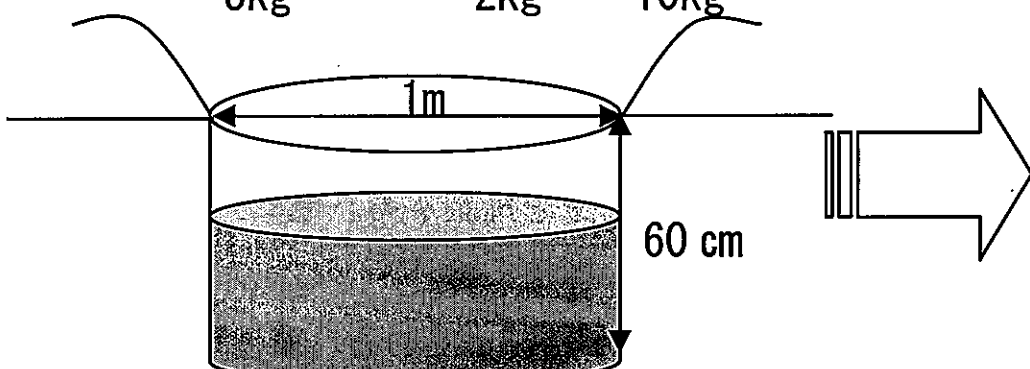
- その① 苗木の根は乾かないように、水に浸しておく
- その② 地面よりも高く植える。←段々沈むため。
- その③ 接ぎ木部分は絶対に土に埋めない。
- その④ 苗木が肥料に触れないようにする。
- その⑤ 50～60cmの充実した芽で切り返す。
- その⑥ 苗木の周りの土を軽く踏みつける。
- その⑦ 土を乾燥させない。

(稲ワラ敷き、定期的なかん水・施肥、芽かぎ)

1 植え穴準備、施肥の例

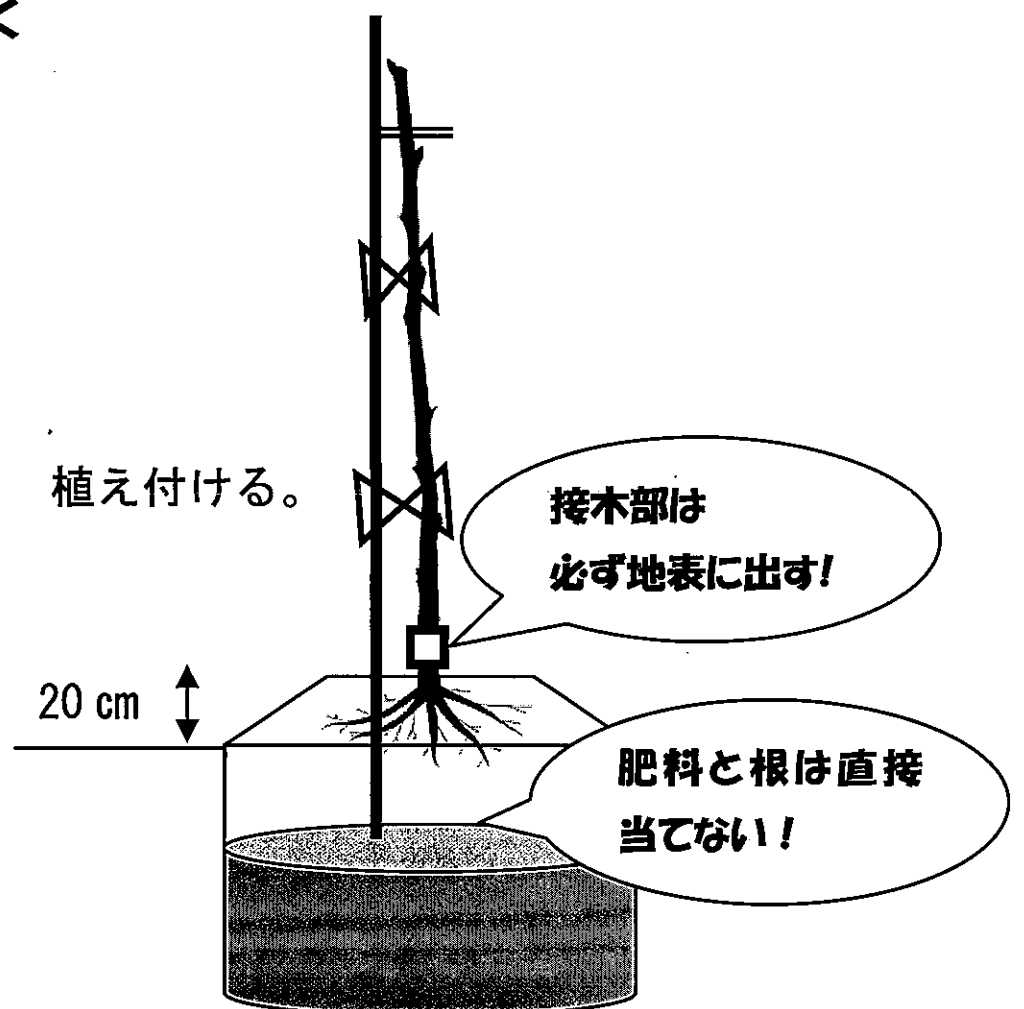
土 + 苦土石灰 + ヨウリン + 完熟堆肥

3kg 2kg 10kg



植え穴は、直径1メートル、深さ60センチで掘り下げる。土に苦土石灰、ヨウリン、堆肥を混ぜながら穴を埋め戻す。(1ヶ月前)

2 植え付ける。



2 幼木期～若木期までの管理・せん定

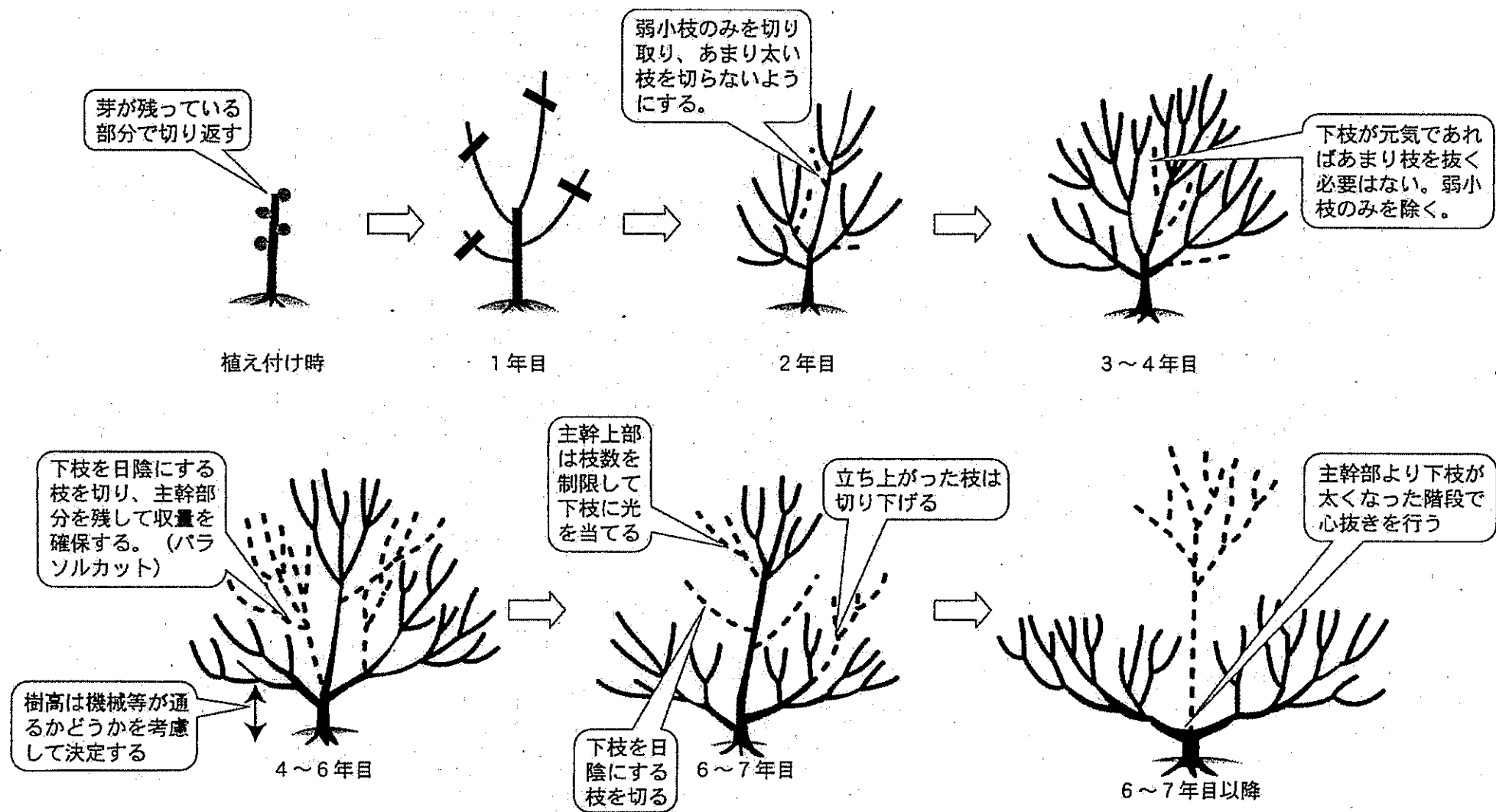


図 若木のせん定 (熊本の果樹 2011. 12 月号より)

～ポイント～

- その① 1～3年目ごろまでは着果をなるべくさせない(樹冠拡大を最優先)。
- その② 3～5年目までは枝先を5分の1程度切り返す(枝を伸ばしながら実を着ける)。
- その③ 7～9年目頃 樹と樹の空間が1メートル以内になっていたら縮伐を行う。

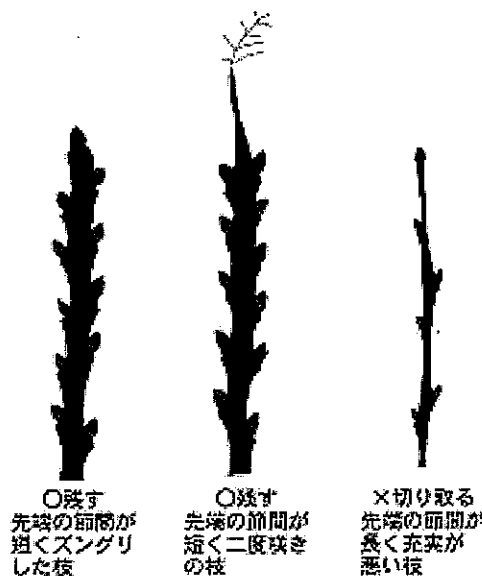
☆永久樹と間伐樹の管理に差を付ける。

永久樹 → 樹を広げる (樹形も重視しながらのせん定)

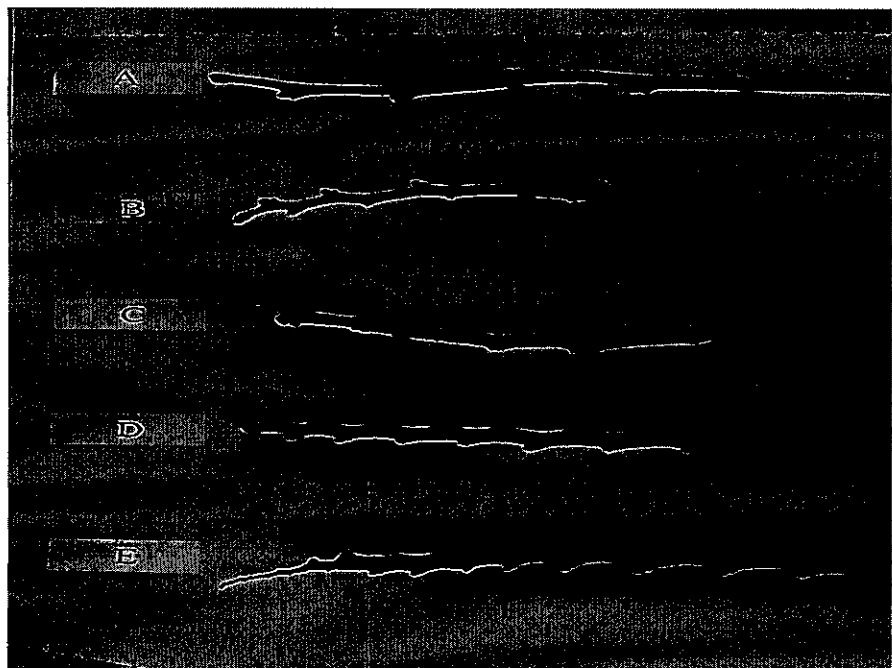
間伐樹 → 実を成らせて、永久樹が大きくなったら切り縮めていく。

□どんな母枝が良い母枝なのか？

- ① ずんぐりむっくり太い枝
節間(芽と芽の距離)が短い枝
- ② 二次伸長しているが、その手前が太い枝
→ 節間が詰まったところで切り返す。
- ③ 実の付いた後のない枝
→ ①、②がないときは、③で太い枝は残す。



- A (×) = 先端が細く、節間が間延び。着穂しない。
- B (×) = 前年の着穂痕があり、その先が細い。着穂の可能性が低い。新梢の発生を抑制。
- C (△) = 前年の着穂痕があり、その先がやや太い。着穂するが新梢の発生を抑制する。他に優良結果母枝があればせん除。
- D (○) = 枝先が太く、節間が詰まっている。着穂可能性が高い。
- E (○) = 二番果の着穂痕がある。着穂の可能性が高い。



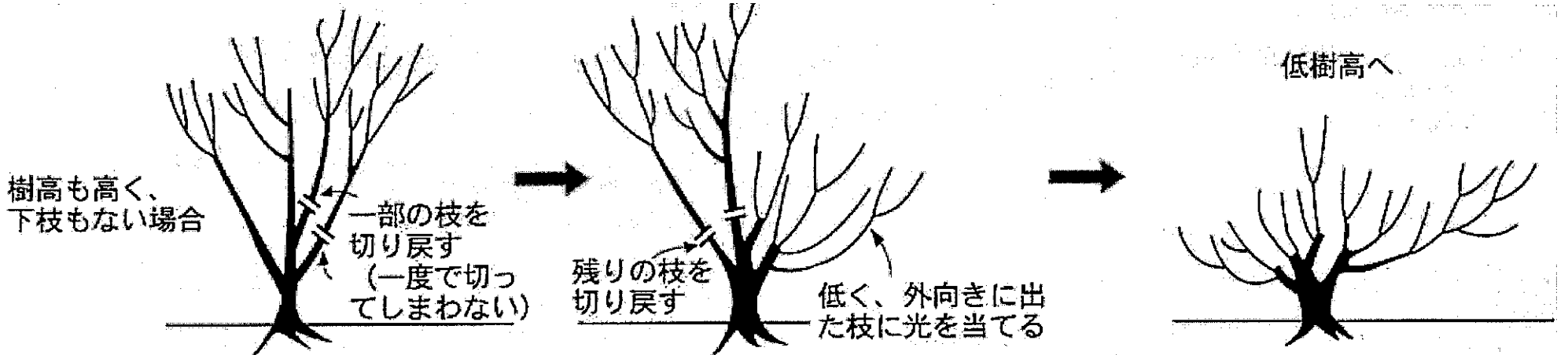
3 成木期の管理・せん定

□ 樹全体を見てみましょう。(樹の栄養状態を見る。)

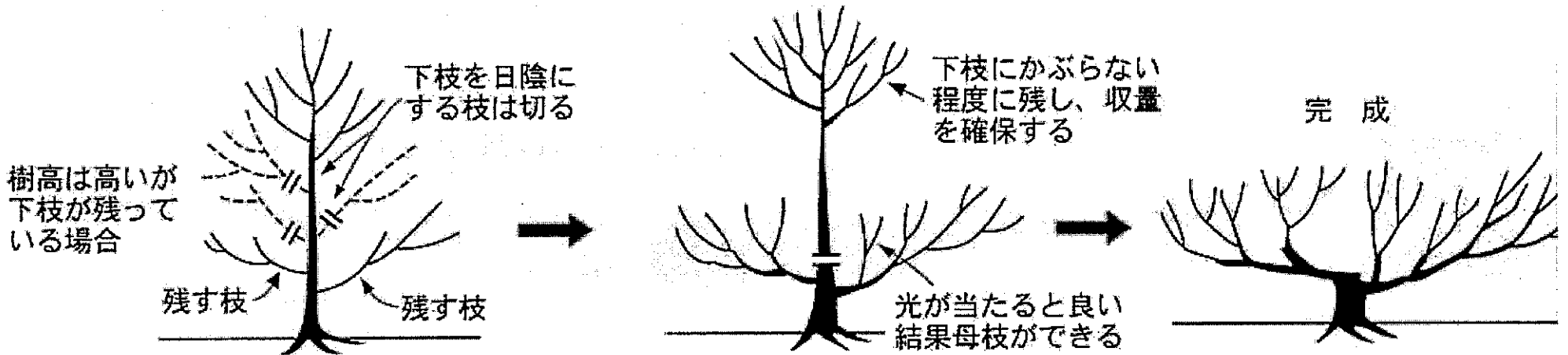
結果母枝の太さ、長さ (毛細血管みたいになっていませんか?)

- ・ 光があたるところにしか良い枝はできない。
- ・ 根元から遠い枝→養分を遠くへ送る無駄な労力 (木材多) →枝は徐々に悪くなる。

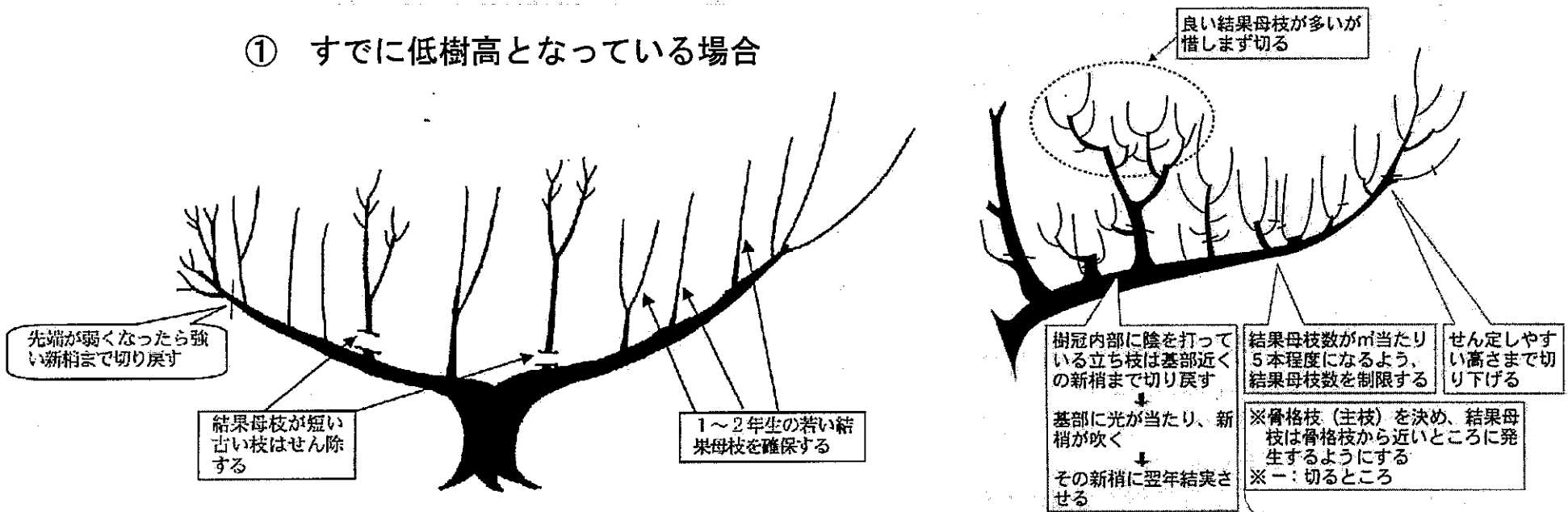
① 樹高 (林になっていませんか?) →樹を作り直す (カットバック)。



② 下枝がある場合 (パラソルカットで低樹高へシフト)



① すでに低樹高となっている場合



□ 樹の骨格 (主枝、亜主枝) はできていますか?

・ 始めに「はさみ」は持たない。母枝の善し悪しを見ない。

- ① 骨組みの邪魔になる大枝は切り落とす。
- ② 強くなる枝 (背からでた枝) は切り落とす。←骨格の枝と競合する。
- ③ 届かない枝は無条件に落とす。(身長+太丸くん) 約2.5~3.5m
- ④ 骨格枝から遠くなった枝は切る。→光が当たって良い枝ができる。

表 優良結果母枝の判断基準

品種	母枝長(cm)	基部の状態	先端の状態	配置本数 (本/m ²)
丹沢	30~50	6mm以上	先端の節間がつまり、ずんぐりと充実したもの	5~7本
筑波	30~60			
銀寄	30~70			
利平栗	30~80			

小玉を3つ拾うのか、
大玉を1つ拾うのか。
→労力と価格を考慮。

4 接ぎ木による自家育苗 ～経費節減、優良苗の確保～

①種子の確保、貯蔵(10月) 100本作るなら120果3kg程度

「筑波」「銀寄」など熟期の遅い品種で、小玉な健全果(M~L)

果実は乾燥しないようにポリ袋に入れて口を閉じ冷蔵庫で保存(6℃) 2月頃 発根

②畝づくり、播種(2~3月) 3cm程度の深さ 13~15cm間隔で播種

③芽かき、施肥、除草(5~9月) 2本出てきたら1本は芽かき。

4月中旬以降に発芽してくる。2本出ているものは1本に整理する。除草を適宜行う。

施肥は、発芽後に1回目を少量施用し、その後は秋まで2ヶ月間で2~3回施用する。過剰施肥に注意。

④畝づくり、移植(10~12月)

10月頃、堆肥を入れて、幅50cm高さ5~10cmの畝を作っておく。

12月、落葉したならば、堀あげ移植する。30cm程度の間隔で2列千鳥植え。

移植の際は、地上部は30cm程度、根は10~15cm程度まで切り戻してから植えつける。

(翌年、苗木を本圃に移植するためには根を切り詰めておく都合が良いため)。

⑤穂木の採取・貯蔵(2月下旬)

充実した穂木を採取し、乾燥しないようポリ袋で密閉し、冷蔵庫で保管する。早い時期に穂木を採取すると貯蔵期間が長くなり△。また、3月以降になると樹液が動き始めるため、活着率が極端に低下するので×。

⑥接木(3月下旬~4月上旬)

台木が発芽し、元葉が展葉した頃に「切り接ぎ法」にて接木する。

⑦施肥・除草(5~9月)

月に1回程度、少量追肥。除草も適宜、行う。

⑧本圃への定植(12~1月)

事前に植え穴を準備しておき、落葉後早めに定植。

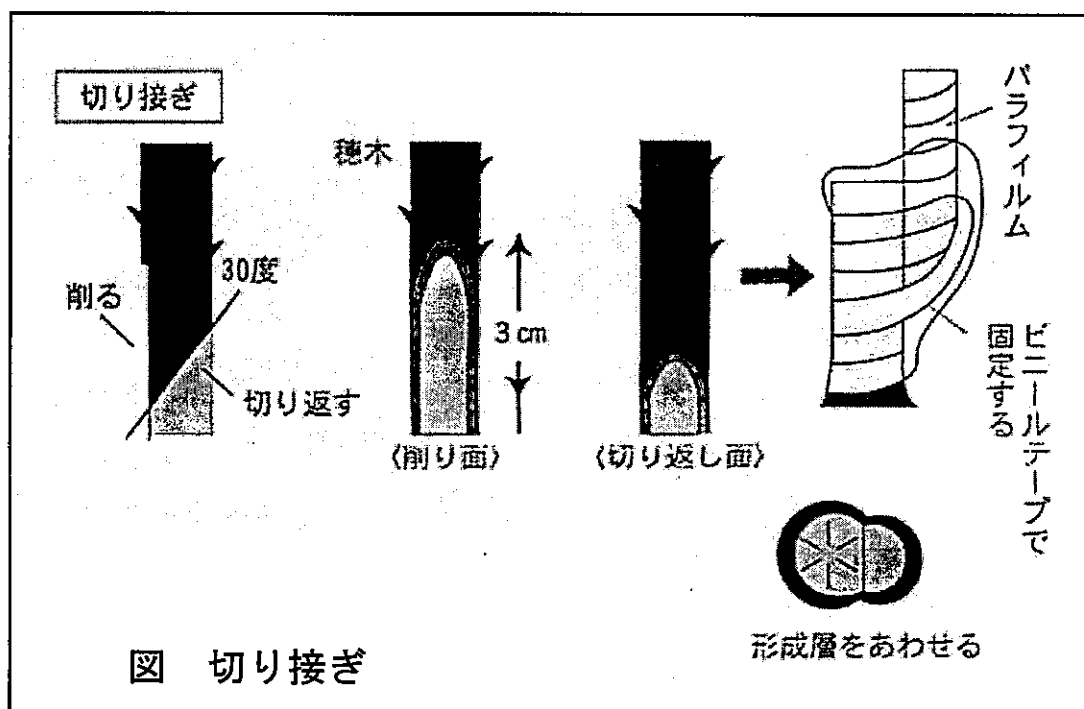


図 切り接ぎ

5 クリの安定多収の条件

1) 適地適作

クりに合った土壌条件: 有効土層が深く、肥沃な土地(× 土層が浅い × 排水不良)

※水田に植え付ける場合は、磐を割り、排水の条件を良くしてから植え付ける。

2) 7~8年前後の縮伐、間伐できるかが安定生産の分かれ道

8年生頃…樹が混み合う→密植→結果層が上だけ&短い母枝→減収

↓ 縮伐、間伐、そしてせん定 **樹冠利用率80%をいかに長く維持できるかどうか!**

太枝を抜き材積量が減る、光が当たる→良質な結果母枝を確保→高品質、収量維持

3) 枝幹害虫(コウモリガ、カミキリムシ)に注意! 樹勢低下→枯死→欠株

4) 施肥

結果期に入ったら徐々に施肥量を増やす。

成木への施肥量 窒素N16kg/10a 12月(30%) 2月(30%) 7月(20%) 9~10月(20%)
もとごえ 元肥 ついひ 追肥 れいごえ お礼肥

5) 草生栽培のすすめ

収穫前に倒れる草を周りに植えることにより、除草作業の省力化、地力維持ができる。

例) イタリアンライグラス、ナギナタガヤ 播種時期: 9~10月

※幹周りは播種しないか草刈を行う。←コウモリガが登ってくるハシゴになるため。

※草生初年目の3月に別途施肥を行う。→窒素N3~4kg

6) こまめな巡回、観察

台芽かき、開花期のチェック、枝の伸び具合の把握、病害虫の侵入